

【19 解読文】 四万温泉入湯者心得 (明治九年：一八七六) (A)

(表紙)

「明治九年

管下布達留

自一月

至十二月 第一課」

四万入浴者 (ゆあみのもの) 心得

抑湯治の目的 (めあて) ハ、泉質 (くすりゆ) の病 症 (やまひ) に応ずる者を求め、

浴法 (ゆのきそく) を執守 (まもる) するハ勿論なれど、又他 (ほか) に一に医療 (りやうぢ)

の力」

を補助 (たすけ) する者あり、温泉 (くすりゆ) 湧出 (わきだし) の地形 (とち) に於る多く

山谷 (たにま) 烟雲 (やまやま) の間 (あいだ) に位し、常に清涼 (しやうじやう) の空気に富

ミ、

且凡俗 (なみなみ) の煩雜 (いそがわしき) を脱かるゝに因て、治療の一大補益 (おほたすけ)

となれハ、遊沐 (ゆにもく) の群客 (ひとひと) 朝夕 (あさゆふ) の挙動 (ふるまひ)、此に

注意 (きをつけ) な」

くんハあるへからず、故に互に飲食 (のミくい) を節制 (ほどよく) し、

心思 (こころ) を淡泊 (さつぱり) にして、常に座右 (ざしき) を清潔 (きれい) にして、

温泉医治 (くすりゆにてなほす) 本真 (まこと) の目途 (めあて) に達せんを要すへし、

因て入浴 (ゆあみ) 心得の大意 (あらまし) を左に陳述 (のぶる) す

一 浴泉 (くすりゆ) の温度 (あたゝかさ) ハ、大抵華氏 (人の名) 寒暖計の九拾八度

乃至百度を適宜 (よろし) とす、若し其熱度 (あつさ) 之より

過るも、常水 (なみみづ) を混 (まぜ) して薬氣 (くすり) を稀薄 (うすく) ならしむ

へからず、本泉 (くすりゆ) を長く放冷 (ひや) して適度 (よいかげん) に

至らしむへし

一 浴数 (ゆあみかず) ハ老人 (としより) 一日壹度、少壯 (わかき) の者ハ一日二度を適

度どのものものとすへし、尤もつとも入浴にふよく（ゆあみの）時刻じこくハ朝夕てうせき（あさゆふ）を
よろしとす

但たゞし、漫りみたに此度このどを過すこすときハ、多おほく害がい（やまひ）を招まねく

へし

一 酒食しゆしょく後ご、直じきに入浴にうよく（ゆあみ）すへからす

一 湯室たうしつ（ふろば）を清きよらかにすハ、湯亭たうてい（あるじ）の元もとより心こころす

へきなれとも、浴客よくかく（ゆあみひと）もまた此こゝに注意ちうい（きをつけ）し、湯たう
室しつ（ふろば）にて髪かみを洗あらひ、あるひハ下帯したおび等とう、決けつして

濯そくくへからす

一 湯室たうしつ（ふろば）におゐて高聲かうせい（たかこい）にて語かたり、殊更ことさら小唄こゝた等の

騒さわかしきハ、無用むようたるへし

但たゞし、客舎かくしや（わがざしき）にありても、隣房りんぼう（となりざしき）等とうへ遠慮ゑんりよを

用もちひ、養生やうじやうの法はふに協かなひ候やうちうい様注意（きをつけ）すへ

し

入浴にふよく（ゆあみ）して応おうずる病ひやうしやう 症（やまひ）

慢性まんせい皮膚病ひふのやまひ 疥癬ひつつノ類るい 頑固くわんこ 癩のり 麻質私まぢつす

脱臼だつぎう挫傷すりこわしに由よりて生しやうする手足てあし関節ふし痿痺しなびしびれ

神しん經に痛いた

（中略）

右之通可ニ相心得一候者也
（右の通り相心得べく候者也）

明治九年六月

熊谷県